

「主体的・対話的で深い学び」を目指す社会科の授業
～小規模校における確かな学力の定着を目指して～

日置市立上市来中学校 教諭 橋口 昭夫

【推薦のポイント】

- 主体的・対話的で深い学びを目指して、「教えない授業」「だれ一人置いていかない授業」を柱に、基本的な指導過程の設定やフラッシュカードの活用、終末の一問、学びのリーダーの育成など生徒や学年ごとの実態に応じた授業改善が図られています。
- 確かな学力を身に付けさせるための「タイトルつけ」や「旅行案作成」などの具体的な実践例は、生徒の自律性や主体性を高める取組として、大いに参考となるものです。

目 次

1	はじめに	1
2	主題設定の理由	1
3	研究の仮説	2
4	実践の柱	2
5	具体的な実践	2
6	成果と課題	9
7	終わりに	10
○	参考文献	
・	中学校学習指導要領解説（平成29年告示） 解説 総則編	（文部科学省）
・	中学校学習指導要領解説（平成29年告示） 解説 社会編	（文部科学省）
・	中学校社会科指導書 東京書籍	

1 はじめに

再任用教員として、25年ぶりに社会科を教えることになった。赴任先は生徒数22人の小規模校で、1学年から3学年のすべてを担当する。久々の授業のため、教科書や学習指導要領での内容確認、そして教材研究に悪戦苦闘する毎日である。

これまで管理職として、学力向上について教職員への指導をしてきたが、今度は自分自身がそれを実践することになった。出会えた生徒に感謝し、これまで学んできた「主体的・対話的で深い学びを目指す社会科の授業」をどの程度実践できたのか、そして確かな学力として生徒の変容にどの程度つながったのか、この一年間の取組を検証しながら振り返ることにした。

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

令和3年度から、新学習指導要領がスタートした。子どもたちが10年後に活躍する社会は、情報化、グローバル化、少子高齢化など、予測不能な社会と言われている。そのような社会で生き抜くために、主体的に学んだり、他者と協働したりしながら課題を解決していく力を育成することは、学校教育に課せられた大きな責務である。その実現に向けては、学校の教育活動全体が「やられる教育活動」から「生徒が主体となった教育活動」へと転換していく必要がある。

授業においても、これまでの「教師主導型の一斉授業」から「生徒主体の授業」への転換を図り、学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」を意識し、指導方法を工夫改善し、将来の自己実現に向かうための確かな学力を定着させていく責任がある。

(2) 学校の教育目標から

ア 本校の学校教育目標

自ら学び、豊かな心を持ち、コミュニケーション能力を備えた心身ともにたくましい生徒の育成

イ 目指す学校像

- (ア) 明るく活気にあふれ、躍動する学校
- (イ) 学ぶ楽しさを実感させ、創造する学校
- (ウ) 家庭・地域と連携し、信頼される学校

ウ 目指す生徒像

- (ア) 自律：自分を律し、自ら学び、確かな判断と行動ができる生徒
- (イ) 敬愛：自他を認め、他人を思いやる心豊かな生徒
- (ウ) 根性：夢に向かって粘り強く、学力・気力・体力の向上に努める生徒

本校の学校教育目標や目指す学校像、生徒像からも、全教育活動において「主体的・対話的で深い学び」を追究する必要がある。

(3) 生徒の実態から

生徒数22人の小規模校である。生徒は純粹で、何事にも一生懸命取り組む。生徒会や地域の伝統行事にも積極的である。しかし、少人数で教師の目が一人一人に行き届き、指示や声かけが増えることで、どちらかというと指示待ちや、やられる教育活動が目につく。

今年度で閉校し、東市来中へ統合することになる生徒にとっては、学習面やすべての教育活動において「自ら課題意識を持ち、主体的に考え行動する態度」を育成させることは急務である。このことから、「主体的・対話的で深い学び」を追究する必要性を強く感じる。

3 研究の仮説

授業において、主体的に学ぶための基本的な指導過程を設定し、一人学びや協働学習のためのワークシートを工夫したり、毎時間の定着の見届けをしたりしていけば、「主体的・対話的で深い学び」へとつながり、その結果「確かな学力」が定着するであろう。

4 実践の柱

研究の仮説を実証するために、以下の9つの実践を柱として取り組むこととした。

- (1) 授業を進めるにあたっての二つの指標
- (2) 生徒の実態把握
- (3) 小学校との系統性の重視
- (4) 基本的な指導過程の設定
- (5) 学習の進め方の提示
- (6) ICTの効果的な活用
- (7) 「誰一人置いていかない授業」のための手立て
- (8) 定期テストの改善
- (9) 「深い学び」への挑戦

5 具体的な実践

(1) 授業を進めるにあたっての二つの指標

授業を進めるにあたっては、以下の二つの指標(基本的な考え)を常に意識して、授業改善に臨むようにした。

- ア 「教えない授業」への転換
- イ 「誰一人置いていかない授業」の追求

ア 「教えない授業」への転換

「教えない授業」への転換という誤解を生むかもしれない。「なるべく教えない授業」という意味で捉えている。これまでの「教師主導型の授業」「説明ばかりの授業」「生徒は聞くだけ、板書をノートに書き移すだけの授業」という自分自身の反省からである。

「主体的・対話的で深い学び」を追究するためには、「課題を明確に示し」、「学習の手順や方法」を確認し、「自分で考えたり調べたりする」「友達と協力してまとめたり、説明し合ったりする」などの時間を確実に確保し、日々の授業の中で習慣化する必要がある。このことを常に念頭に置き、授業の工夫・改善に臨んだ。

イ 「誰一人置いていかない授業」の追求

「授業はどのレベルの生徒に合わせて行えばよいか」初任者研修などでよく話題になるテーマである。「真ん中くらいの生徒、授業の進程を考えると仕方がない」と答える先生方も少なくない。しかし、私自身は迷いなく「一番分らない生徒に合わせて」と答えている。自分自身が中学時代、「勉強が苦手であった」こと、「そのような私を叱咤激励し導いて下さった恩師にあこがれて教師になった」ことからである。その思いは、国際連合が提唱する「SDGs」の「誰一人置いていかない社会の創造」で確信に至った。

大切なことは、「一番分らない生徒」に合わせても、全員が理解でき、確かな学力が身に付き、授業の進程も確保できるように「授業を工夫」することである。

(2) 生徒の実態把握

ア NRTの結果から

1年	全体偏差値は全国比を大きく下回っている。
2年	全体偏差値は全国比を上回っている。
3年	全体偏差値は全国比を下回っているが、向上は見られる。

イ 課題に対する具体的な取組

1年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体的に学力が低い傾向にあるので、まずは<u>学び方から身に付けさせたい</u>。 ○ 教科書主体のワークシートを作成し、<u>小学校から振り返りながら</u>知識・理解を徹底させ、自信につなげたい。 ○ 地歴ともに課題があるので、<u>フラッシュカードを活用した基礎基本の徹底</u>と友達との<u>学び合い</u>を通して、興味関心を高めるとともに思考・判断力の向上に努めたい。
2年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体的に学力が定着しつつあるので、フラッシュカードを活用した基礎基本の徹底や友達との学び合いに加え、<u>統計資料やグラフ等の読み取り</u>、社会的事象の背景についての<u>考察やまとめ</u>など、思考力・判断力・表現力の向上に努めたい。 ○ さらに「誰一人置いていかない授業」を目指すための、<u>学びリーダーの育成</u>を図りたい。
3年	<ul style="list-style-type: none"> ○ 改善傾向はみられるものの、全国比は下回っているので、まずは入試に向け、フラッシュカードを活用した基礎基本の徹底と友達との学び合いを通して、興味関心を高めるとともに<u>資料やグラフの読み取り</u>、<u>まとめ方のコツ</u>に気付かせ、<u>無回答を減らす指導</u>を行う。 ○ また、入試対策として、単元ごとに<u>過去の入試問題にチャレンジ</u>させるなど、基礎基本に特化しながら、確実な力を身に付けさせたい。

(3) 小学校との系統性の重視

授業を進めるにあたって、年度当初に小学校から教科書を借用した。小学校では3年生で「私たちの町の生活」、4年生で「私たちの県や郷土の伝統文化」、5年生で「私たちの国土と産業」、6年生で「日本の歴史と政治」について学習しており、中学校における「歴史・地理・公民」学習につながる学習をしている。そこで、授業の導入にあたっては、小学校での学習内容を確認するようにし、小学校の学習とつながっていることを確認している。特に歴史の分野では小学校の学習との重なりが多い。

【小6歴史「村から国へ」 → 中1歴史「弥生文化と邪馬台国」】

小6の学習	中1の学習
道具(石包丁・木製の鋏)	打製石器・磨製石器へ
青銅器(銅鐸・銅剣)	祭りのための銅鏡・銅鐸へ
鉄器(小刀)	武器としての銅剣・銅矛へ
吉野ケ里遺跡	弥生時代の遺跡と稲作へ
邪馬台国を紹介した中国の歴史書	邪馬台国と卑弥呼へ 「漢書」地理志 「後漢書」東夷伝 「魏志」倭人伝



中学校では、小学校の学習を発展させるため、「歴史的事象」の「知識・理解」から「なぜ」「どのように」を重視し、写真や統計資料の活用などを通して、思考力・判断力・表現力の育成が図られるよう工夫している。

(4) 基本的な指導過程の設定

「主体的・対話的で深い学び」を追究するために、次のような指導過程を設定した。

- ア 基礎基本の確認（フラッシュカードの活用）
- イ 単元・本時のゴールの設定
- ウ 調べ・学び合い学習（ワークシートやタブレットの活用）
- エ 生徒による本時のまとめ
- オ 一問へのチャレンジ（入試問題や定着度調査など）

ア 基礎基本の確認

(7) フラッシュカードの活用

最初は、パソコンと電子黒板を使って試みたが、導入時の貴重な5分間に、パソコンの起動や電子黒板の準備などの手間を省き、無駄なくスピーディに活用することができる手書きのフラッシュカードの方が使い勝手が良かった。

そこで活用にあたっては、以下の方法で、基礎基本の定着を図っている。



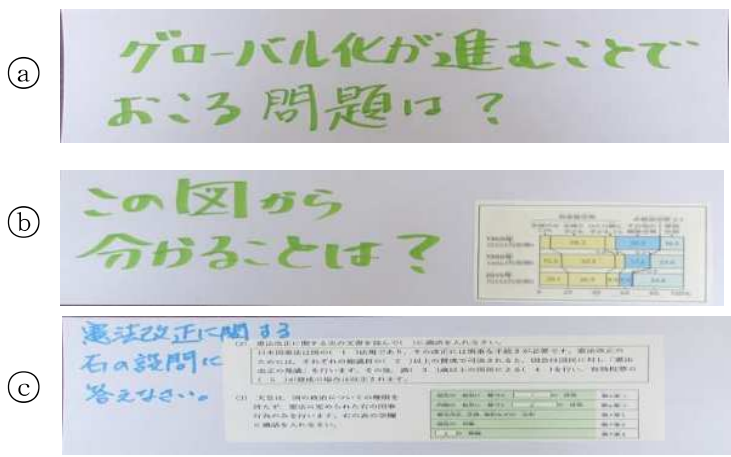
【フラッシュカードに取り組む3年生】

- 毎時間6枚～10枚程度、基礎基本を中心に作成する。
- 授業が進むにつれカードは増えるが、それを毎時間継続することで定着を図る。
- 一斉ではなく、3人一組または2人一組で問題を出し合う。

(4) 発展問題・入試問題への深化

最初は一問一答形式のフラッシュカードを作成していたが、一月を過ぎるころには膨大な量になったので、内容をまとめたり、問題形式に改めたりした。

- 基礎基本を問う①一問一答式から、授業で触れた②資料や写真など思考力・判断力を問う問題も加えた。
- 一月を経過し定着したカードの内容は、③発展問題や入試問題へと再編集し、応用力の定着を目指した。

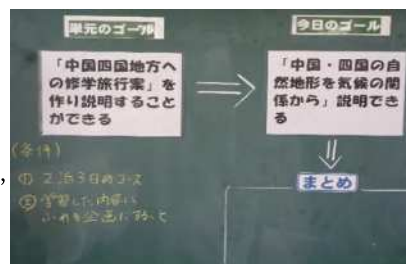


【フラッシュカード1年生】

イ 単元・本時のゴール設定

(7) 単元のゴール

これまで、「毎時間の学習目標」は設定するようにしていたが、「単元としての目標設定やまとめ」は行っていなかった。しかし、指導書や年間指導計画や学習指導要領を参照する中で、学習内容が単元のまとまりとして構成され、毎時間の学習に関連があることが分かった。そこで、毎時間の導入で、「単元のゴール」を設定し、「今日のゴール」と関連付けて授業を進めるようにした。



【単元・本時のゴール提示】

(イ) 本時のゴール

「本時のゴール」では、一時間の学習を振り返り、まとめたり、説明したりする時間を取るようにした。その際は、「単元のゴール」との関連を意識させながらまとめさせた。



【本時のまとめ 3年生】

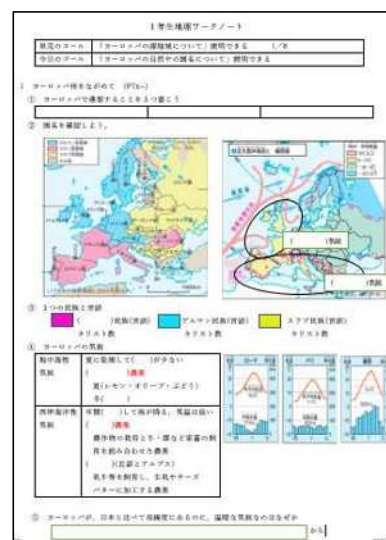
ウ 調べ・学び合い学習

「主体的・対話的で深い学び」とは、「教えない授業への転換」だと思っている。教師主導や説明中心の一斉授業から、生徒自身が課題解決に向けて、様々なアイテムを活用し、「一人で調べたり、友達と学び合ったり」しながら解決していく授業を意識し、以下のとおり取り組んでいる。

(7) ワークシートの作成

「できるだけ教えない授業」をするためには、生徒が自ら課題を追究しやすいワークシートや手立てが必要である。学年の実態に応じて作成しているが、主体的な学びを実現するためには、ワークシート作成をはじめとする事前の教材研究がとても重要であると感じ、以下のとおり作成している。

- 「単元と本時のゴール」を明記
- ゴール追求のためのヒントや資料の提示
- 知識理解から探究活動(地図写真・統計資料)
- 生徒のまとめと説明



【ワークシート 1年地理】

(4) 多様な学習スタイル

これまでの一斉学習スタイルにとらわれない、生徒がリラックスした環境で学び合いや思考・判断が充実するよう、多様な学習スタイルを、以下のように取り入れるようにした。

- 一人学び、ペア、グループ学習の自由選択
- 教室内の学習場所と移動の自由
- タブレットの自由検索や図書館の利用

エ 一問へのチャレンジ

授業の終末には、必ず本時の学習と関連する演習にチャレンジするようにしている。演習問題は、補助教材や定着度調査過去問題、入試の過去問題を中心に計画的に取り組ませている。

- 問題は終末に5分程度とする。
- 問題を解いた後、解法について学び合う。
- 間違った問題の、「理由と解き方」を説明する。



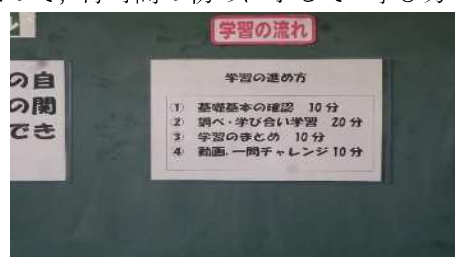
【学び合い学習 1年生】

(5) 学習の進め方の提示

「主体的・対話的で深い学び」を進めるために一単位時間の学習の進め方を、以下のとおり生徒に提示し、時間を決めて授業を進めるようにした。

特に1年生は、自学自習の習慣が身に付いていなかったため、毎時間の初めに示して「学び方の学習」を身に付けるようにした。

ア	基礎基本間確認	(5分)
イ	一人学び・調べ学習	(10分)
ウ	友達との学び合い	(15分)
エ	全体でまとめ	(10分)
オ	一問のチャレンジ	(10分)



【学習の流れ提示】

(6) ICTの効果的な活用

授業を進めるにあたっては電子黒板やタブレットを毎時間活用した。授業の始まりには社会科の係の生徒が、電子黒板を起動させ待っている。また生徒は、登校時にタブレットを起動し授業に臨んでおり、以下のように活用している。

ア 電子黒板の活用

- 導入時の写真・地図等の提示として
- 教科書の写真やイラスト、統計資料の拡大や生徒の説明用ディスプレイとして
- 一人学び、ペア学習時のタイマーとして
- 生徒の意見集約やまとめの説明用として
- 終末のまとめの動画視聴として

イ タブレットの活用

- 調べ学習や学び合いの検索ツールとして
- Web問題への解答のツールとして
- 生徒のまとめの集約として
- 欠席者のリモート参加のツールとして



【タブレットでまとめる2年生】

(7) 「誰一人置いていかない授業」のための手立て

ア 苦手な生徒を主役に置いた授業構成

授業は、苦手な生徒や理解の遅い生徒に合わせて行う。そのために、フラッシュカードでの基礎基本の確認や学び合いは、苦手な生徒を中心に据え、理解の早い生徒と対にして、その生徒が理解できるまで学び合いをするように指示している。

イ 「学びリーダー」の育成

2年生については、「学びリーダー」の育成を目指している。「全体を見て遅い生徒を気にかけることができる生徒、横について調べ方や解き方を教えてくれる生徒」が適任である。調べ学習や学び合いにおいて、「学びリーダー」は「誰一人置いていかない授業」の推進役を担っている。

ウ 個別の目標設定と個別面談の実施

個人の学習の頑張りを個々に評価し、見届け励ましてあげることによって、「誰一人置いていかない授業」に近づきたい。テスト前は、個々に面談し目標点を設定したり、目標を達成するための個別の学習計画を一緒に考えたりしている。



【学びリーダー2年生】

(8) 定期テストの改善

ア 「解答から解法を追究する学び」への転換

これまでテストが終了すると「解答を確認し、点数まちがいをチェックし、訂正ノートを提出させる」ことの繰り返しであった。

今年度は解答の確認ではなく「解法の学び合い」を通して、確かな学力につながるように時間を確保している。

イ 「解き方の学び合い」から再テストへ

定期テストが終了し、解き方を学び合った後、再テストを実施し、確実に定着したかを見届けるようにしている。再テスト等の結果は学期の評価につながることを、生徒には前もって説明しているので、積極的に取り組んでいる。

- テスト後「解きかた」の学び合いの実施
- テストの再テストを実施し定着を確認
- 再々テストまで実施、結果を評価とする。

(9) 深い学びへの挑戦

一学期は「日々の授業をこなすこと」と「生徒主体の学習を習慣づけること」で精一杯であった。そのため、「主体的・対話的な学習」については、ある程度は形式化できた。しかしその学習が、生徒にとって「深い学び(夢中になって学ぶ、時間を忘れて学ぶ)」にまでつながっているかは、反省の日々であった。

二学期になり、「より深い学びに」につなげることができないか思案した結果、以下の二つの学習に挑戦してみた。

ア 毎時間の学習での「深い学び」

(7) 歴史学習での「タイトル付け」

単元のゴール	「それぞれの歴史学習にタイトルをつけ」理由を説明できる
今日のゴール	「フランスの市民革命とナポレオンについて」説明できる

1 教科書で調べ学習 (P152～)

(1) 「」

<p>フランス</p> 	<p>絶対王政への反発</p> <p>① まずバスチーユの牢獄を襲撃 ⇒ なぜ牢獄だった? (絶対王政に反対する政治犯が収容 されていた)から</p> <p>② 1789年 フランス革命 パリでおこった市民革命 「人権宣言」の発表</p> 
---	---

③ 資料6「人権宣言」第11条には何が書いてある?
簡潔に書きなさい。

思想・及び言論の自由(すべての市民が自由に話し、書き、印刷、出版することができる)を認める

【2年生歴史学習のワークシート「フランスの市民革命」】

この学習を終えた後に、生徒は以下の要領で「タイトル(見出し)」を付ける。

- この学習全体を紹介する新聞のタイトルをイメージして作成する。
- 学習内容が一目で分かるインパクトのあるタイトルを付ける。
- それぞれのタイトルについて説明するとともに、その理由を述べる。

(イ) 生徒の付けた「タイトル」

教科書のタイトルは「フランス革命」である。

生徒 A	絶対王政への反発！ 市民の自由「人権宣言」発表
生徒 B	「人権宣言」発表 国民は自由に
生徒 C	バスチーユ牢獄襲撃！ フランス革命！ 市民「私たちは一人の尊き人間である」
生徒 D	民衆の逆襲 新しい時代始まる
生徒 E	打倒王政！ イギリスに続け！
生徒 F	フランス革命の始まり 国民に自由を

イ 単元のまとめでの「深い学び」

「単元のまとめ」については先述したとおりであるが、単元のまとめとして「深い学び」につなげることはできないか考え、地理学習のまとめとして、以下のとおり「修学旅行の旅行計画」の作成に取り組んだ。

(例) 2年生地理「近畿地方」

単元のゴール	近畿地方を3泊4日で修学旅行に行く旅程表を作り、発表できる
↓	
第1時のゴール	自然地形や気候の特色を説明できる
第2時のゴール	交通網の整備やヒトやモノの移動の変化を説明できる
第3時のゴール	産業の特色や発展の変化を説明できる
第4時のゴール	人々の生活の変化や課題について、解決策を考え説明できる
↓	
第5時まとめ (作成の条件)	3泊4日の修学旅行の旅程表を作成し説明できる (単元で学習した自然や気候、産業や人々の生活を体感できる企画とすること)



【近畿地方の旅行案のプレゼンテーション】



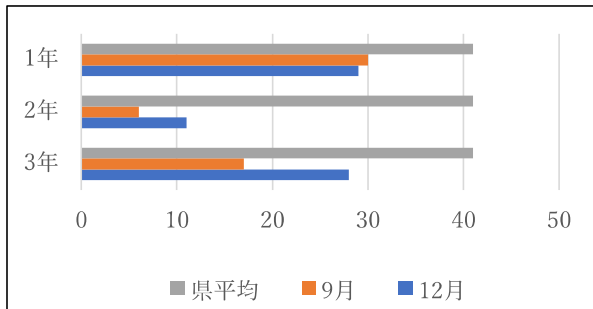
【文化祭での展示発表】

6 成果と課題

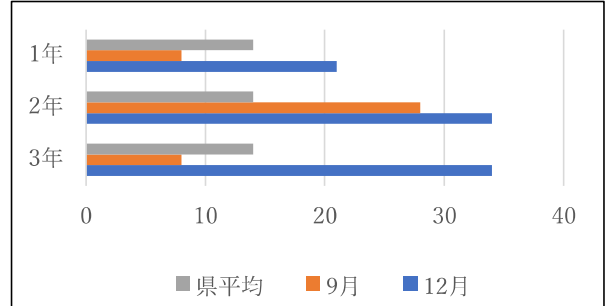
(1) 実践の成果(生徒の変容)

ア 「主体的・対話的な学習」についての生徒のアンケート結果から

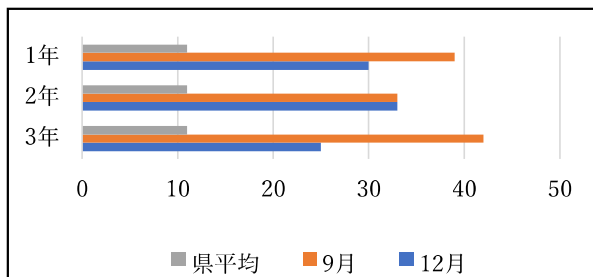
【鹿児島学習定着度調査の生徒質問紙を活用して、9月・12月に実施 県平均はR4年の県平均】



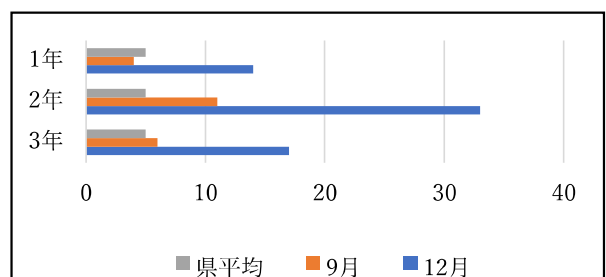
【教師の説明】



【自ら考え調べる学習】



【ペアやグループでの学び合いや教え合い】



【お互いに発表・説明】

- 「教師の説明」は、「教師が話し過ぎていないか」をチェックする項目である。本校は、全学年とも県平均より教師の説明の時間が短くなっており、生徒が主体的に取り組む時間が確保されていることが分かる。1年生と3年生の「教師の説明」が9月に比べて12月が長くなっているのは、生徒の理解度に応じて少し説明を増やした方がよいと判断したからである。

これらのことから、具体的な実践(1)で述べた「なるべく教えない授業」ができつつあることが分かる。

- 「自ら考え調べる学習」は、全学年とも県平均を上回っている。特に9月より12月の方がさらに高く、「主体的な学習」が充実しつつあることが分かる。特に2年生は高いレベルにある。

これらのことから、具体的な実践(4)で述べた「基本的な指導過程」や実践(5)の「学習の進め方」が生徒に定着していることが分かる。

- 「ペアやグループでの学び合いや教え合い」は、全学年とも県平均を上回っている。9月に比べて12月がやや減少しているのは、具体的な実践(4)で述べた「基本的な指導過程」や実践(5)の「学習の進め方」が生徒に定着していることから、一人学び「自ら考え調べる学習」が高まっている結果と相関関係があるのではないかと考える。

これらのことから、「主体的・対話的な学び」が定着しつつあることが分かる。

- 「お互いに発表・説明」は、全学年とも県平均を上回っており、全学年とも9月より12月の方が高い。特に2年生は、2学期から単元のまとめとして「旅行案を作る」、「学習のタイトル付け」にチャレンジしたことから、一層高まっていることが分かる。

イ 「深い学び」について

- 特に2年生を中心に「深い学び」に挑戦した。「単元のまとめ」の「旅行案作成」についてはとても楽しみにしているようで、「生活の記録」によく書いているとのこと。2年生の担任から「どのような授業をしているのですか」と嬉しい質問をいただけるようになった。

- 「旅行案作成」については、最初は単元のまとめとして時間を特設して行っていたが、単元が進むにつれて要領を得て、生徒は毎時間の授業を進めながら、並行して旅行案を作成するようになった。
- 「学習のタイトル付け」については、学習全体を象徴するタイトルで、インパクトのあるタイトルを付けることを条件に、その日のタイトルMVPを生徒の投票で決めるようにしたので、「今日こそはMVPを取るぞ。」と意気込んで授業に臨む姿が見られるようになり、「深い学び」へ近づきつつあると実感している。
また、常にタイトル付けを意識しながら学習に取り組んでいるので、学びながら同時に全体を把握し、要約する力、語彙力や表現する力が身に付いていると感じる。

ウ 「確かな学力の定着」について

- 「基本的な学習過程」や「学習の進め方」を徹底したことで、学び方が身に付いてきた。
- フラッシュカードを継続したことで基礎基本が確実に定着しつつある。またフラッシュカードを発展問題へと工夫したことで、資料やグラフ等を読み取る力がついてきた。
- 小学校の学習を振り返ることで、基礎基本中心の学習から思考力・判断力・表現力を培う学習への転換を図ることができるようになった。
- ワークシートを工夫したことで、調べ学習や友達との学び合いが活発になり、興味関心を高めるとともに思考力・判断力の向上につながった。
- 特に2年生については、学び合いを支援する「学びリーダー」を育てることができた。
- テスト後の「解法の追求学習」を通して、資料やグラフの読み取り、まとめ方のコツが身に付き、無回答を減らすことにつながった。

(2) 実践の課題

- 「生徒の実態」から、1・3年生は基礎基本の定着と学び方の育成が最優先になっている。「主体的・対話的な学び」と「確かな学力の定着」を考えた授業のバランスや更なる工夫改善が必要である。
- 「学びリーダー」については、2年生と3年生については育成できつつある。今後は1年生も含め、一人でも多くの「学びリーダー」を育成し、「誰一人置いていかない授業」に近づきたい。
- 「主体的・対話的な学習」はおおむね実践できつつある。この学習が更に「深い学び」まで高まるように、地歴公民の3分野において、生徒の興味関心を高める実践を考えていきたい。またそこに近づくためには、確かな学力の定着は必須条件なので、学年の実態に応じた指導方法の改善工夫に今後も一層取り組んでいく必要がある。

7 終わりに

年度当初は学力の個人差や学年差に悩んだが、基本的な指導過程を設定し、一人学びや協働学習のためのワークシートを工夫することで、生徒は主体的に、友達と協力しながら学び合うようになった。校内テスト等における結果からも知識理解だけでなく、資料の読み取りや文章問題にも粘り強く取り組む姿が見られるようになった。二学期以降は、「より深い学びを目指した挑戦」をしており、今後さらに深い学びにつながるよう、学びリーダーの育成や授業改善に日々努力していきたい。